

## 雛蔵の由来

祐月本麿の雛蔵は、その天井の棟木に「維時大正五年拾月貳日 和田祐之介 立之矣」と書かれていることから、今から 99 年前の大正 5 年（1916）に初代和田祐之介によって建てられたことが明らかである。

現在の株式会社祐月本麿は、明治 23 年に初代和田祐之介により和田際物店として現在地に開業したのが始まりである。

明治 19 年 1 月「地図地籍一筆限帳（馬口労町）」（茨城県立歴史館所蔵）に

「 式千式百八拾番 馬口労町北側  
宅地百八拾八坪貳合四勺 持主 五藤市郎衛門  
但縦廿三間二分四厘  
横八間壱分 二等ノ乙 」

とあり、「持主 五藤市郎衛門」の右脇に別筆で「和田祐之介」という書き入れがあり、その書き入れは「昭和十二年四月現在所有者名」を記したものであるというから、もとは「五藤市郎衛門」の所有地で、のちに「和田祐之介」の所有に帰したということになる。「五藤市郎衛門」は何代も続いた「伍藤」という薬屋であり、和田祐之介は当時 100 年以上たっていた家を土地つきで購入し、店舗兼住居とした。

その後大正 5 年にこの雛蔵を建て、昭和 6 年に店舗を改築した。雛蔵は棟木が何重にも入り組んだ堅牢な作りで、今から 99 年前の大正初期の建築である。

雛蔵の所在地である水戸市末広町は、もとは馬口労町といい古くは常葉村の一部であったが、正保元年（1644）に城下町となった。水戸の城下町の入口に位置し、近郷近在の村々から来た人々や馬・荷物が最初に城下町に入る所であったため、旅人たちの休息所・旅籠が多く設けられ、荷物を運んできた馬、旅人を乗せてきた馬を休ませる立場があり、馬方・馬喰（博労・伯楽）たちが集まることから馬口労（馬喰・博労・伯楽）町と呼ばれた（新荘公民館『馬口労町物語』）。古くから大高家・小泉家をはじめ豪商が軒を並べた町であり、「大店がこの町に並び、（中略）城下第一の間屋町として繁盛した」（町田香径『明治大正の水戸を行く』）

祐月本麿の雛蔵は、江戸時代から明治・大正・昭和と「市中第一の繁華街」（同書）で、大きな商家の店舗や蔵が立ち並んでいた馬口労町の往時の姿を偲ぶことができる建物のひとつで、そのなかでも唯一建造年代（大正 5 年）が明らかな建物である。

茨城地方史研究会 会長 久信田喜一氏 文

2015 年（平成 27 年） 2 月吉日